

國學院大學學術情報リポジトリ

「世の中騒がし」に疾病を読むこと：
『源氏物語』薄雲巻の再検討

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-07-02 キーワード (Ja): 世の中騒がし, 『源氏物語』薄雲巻, 疫病, 『栄花物語』 キーワード (En): 作成者: 吉海, 直人, Yoshikai, Naoto メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000559

〔研究ノート〕

「世の中騒がし」に疫病を読むこと

— 『源氏物語』薄雲巻の再検討 —

吉海直人

はじめに

長年研究に携わっていると、かえって思い込みが強くなることがあるようだ。たとえば古語辞典を参照していると、研究成果によって辞書の説明は刷新されていくものだとばかり思っていた。もちろんそういった面も否定できないのだが、中には研究以前に辞書の方が本質を射抜いていることもある。最近の辞書はなかなかいいことが書かれているとあらためて認識させられた。考えてみればそれは当然のことであり、むしろ自分の

頭が研究至上主義思想に毒されていることを思い知った。ここに紹介する「世の中騒がし」がまさにその好例だったので、自省を込めて紹介したい。

さて、「騒がし」という形容詞から、どんなことが想像されるだろうか。辞書の一番目の説明は、そのまま「騒がしい・騒々しい」（学研『全訳古語辞典』）となっているものが多い。この説明なら、わざわざ辞書を参照する必要はあるまい。できれば最初に現代語の用法とは異なるものをあげてほしいと願うのは虫がよすぎるだろうか。

学研の辞書の場合は、二番目に「忙しい・あわただしい・落

ち着かない」とあって、これも見る必要はなさそうである。ところが末尾の注意に、「②の意味は現代語「さわがしい」にはない」という面白いコメントが付されていた。これなど現代語は音(聴覚)に訴えるものであって、比喩的なものは含まないという意味であろう。いわれてみれば確かにその通りである。

ここで取り上げたいのは②ではなく、学研の辞書の三番目に書かれている意味である。というのも、そこに「世の中が穏やかでない。騒然としている」とあったからである。例として引用されている『枕草子』は、「世の中に事出で来て、さわがしうなりて」であった。だからこそ意味にも「世の中」が含まれているのであろう。

しかしこれだけでは終わらない。なんと学研の辞書には、別に「世の中騒がし」項が設けられていたからである(後述)。では「騒がし」と「世の中騒がし」では一体何が違うのだろうか。何故わざわざ「世の中騒がし」が立項されているのだろうか。だんだん興味がわいてきた。

一

どうやら「騒がし」という語には、意味の広がりがありそう

だ。同じように「世の中」にもいろんな意味があることは古典の常識である。あらためて小学館『日本国語大辞典第二版』を見ると、「さわがしい」でなんと七項目にも分けて意味が掲載されていた。その六番目の意味として、

(6) (戦争や疫病または天変地異などで) 社会の情勢が不安定である。世情が落ち着かない。

とあった(「世の中」項の方にはそういった記述は認められなかった)。これが私が注目していることである。その例として引用されている作品を見ると、

・すべて世の中いと騒がしかなり。これがわづらふやうに、みな人あなる。(『うつほ物語』あて宮巻117頁)

・殿などおはしまさで後、世の中に事出で来、さわがしうなりて、宮もまゐらせ給はず。

(『枕草子』一三七段「殿などのおはしまさで後」259頁)
・その頃、世のちいと騒がしうて、道大路にゆゆしきもの多う、やんごとなき人もあまた亡うなりなどし給へば、あはれにはかなきことを誰も思すに、(『狭衣物語四』338頁)
とあって、三例とも「世の中」と結びついていることを確認した。

この中の『枕草子』「殿などおはしまさで後」の例(学研に

もあり）は、間に「事出で来」が挿入されているのでわかりにくいですが、新編全集の頭注二二には、「四月五月に流行した疫病の折のこを含めた表現か。」とコメントされていた。その点、『狭衣物語』の例は明確（具体的）である。しかも頭注二には、「世の中」が「騒がし」とは疫病が流行して世間が落ち着かない状態をいう。」（338頁）とはっきり示されている。さらに続く頭注三にも、

疫病のため、行き倒れになる人、あるいはけがれを忌んで死ぬ前にかつぎ出す場合もあり、死体のことをさす。

と補われていた。

二つの言葉が合体して連語・複合語になると、また新たな意味が発生することがある。それが日本語の面白いところであろう。ただし古語辞典などの項目は、短い一品詞で立項されるのが原則なので、こういった複合表現が見出しに上がることは滅多にないようだ。参考までに岩波書店『古語辞典』で「さわがし」を引いてみると、二番目の説明として「物情騒然たる状態や疫病流行などについていう。」と指摘されていた。同様に角川書店『古語辞典』の「さわがし」項の三番目にも、「（世情が）不安だ。不穏だ。また特に、疫病の流行にいうこともある。」とコメントされていた。さらに角川書店『古語大辞典』でも、

三番目の説明の中に「疫病の流行に関して用いることが多い」とあった。

この場合、必ずしも「世の中」との関連には触れられていないので、「騒がし」単独でも疫病流行の意味を担っていると判断しているようである。いずれにしても多くの古語辞典では、かなり早くから「騒がし」の中に「疫病流行」を指摘していたことがわかった（その嚆矢は未詳）。そこで試みに「世の中騒がし」の論文を探してみたが、古い論文は見当たらなかった。要するに複数の古語辞典の方が、早くから疫病を読み取っていたということである。

二

そういった中で、さすがに『日本国語大辞典第二版』でも、「世の中」に続いてわざわざ「世の中騒がし」が立項されており、

(1) 悪疫が流行して、世間が落ち着かない。

と記されていた。またその例として、

・ 親などの心地あしとて、例ならぬけしきなる。まして世の中などさわがしと聞ゆるころは、よろづのことおぼえず。

『枕草子』一四四段「胸つぶるるもの」270頁)

・年頃思ふことなくて、世中さはがしといえは、この君たち
いかがと思へど、
(『成尋阿闍梨母集』96頁)

・主上の御悩、大方世中のさわがしき時は、五条の天神に頼
をかけらる。
(『徒然草』二〇三段240頁)

が引用されていた。このうちの『枕草子』一四四段「胸つぶる
るもの」を見てみよう。「世の中などさわがしと聞ゆるころ」
について、新編全集頭注四には「悪疫流行のころ」と記してあ
る。その直前の「例ならぬけしき」について注はなく、現代語
訳も「ふだんとは違ったようす」とあるが、「心地―例ならぬ」
は重病で死にそうになっていると解すべきであろう。

次の『成尋阿闍梨母集』は延久三年(一〇七一年)の秋のこ
とようである。講談社学術文庫の語釈には、

世間の様子がおだやかでないこと、物情騒然たる状態や疫
病流行などについていう。
(99頁)

とある(岩波の『古語辞典』と同じ)。翌年の延久四年には痘
瘡が流行しようだが、この年の記録は見当たらなかった。

こういった『日本国語大辞典第二版』から進展したのが、小
学館『全文全訳古語辞典』である。というのも「さわがし」項
に参考が設けられ、そこで、

「世の中さわがし」の形で用いる場合は、多く流行病など
で世間が騒然としていることにいう。

と、あえて「世の中さわがし」という複合語での特殊な意味(流
行病)が掲載されているからである。これが学研『全訳古語辞
典』や旺文社『全訳古語辞典第三版』になるとさらに一歩踏み
込んで、「よのなか―さわがし」(連語)項が別に立てられてい
た。その上で学研は、「悪性の伝染病が流行していて、世の中
が落ち着かない。」と、伝染病に特化した説明になっている。

旺文社にしても、「疫病が流行して世間がさわいである。」と説
明してある。小学館『精選版日本国語大辞典』になると「世
中騒がし」項で真つ先に、「悪疫が流行して、世間が落ち着かない。」
をあげている。これは当然ながら『日本国語大辞典第二版』と
まったく同じ説明である。

こうなると、「世の中騒がし」が熟語・複合語として認知さ
れていたというか、重要な常套表現としてとらえられていたと
いえそうである。では従来の一般的な古語辞典はどうであるう
か。たとえば三省堂『全訳読解古語辞典』の「さわがし」を見
ると、「世の中の状況や人心が不安定で落ち着かない。おだや
かでない。」と、漠然とした説明にとどまっていた。いつも何
かと頼みにしている小学館『古語大辞典』にしても、「さわがし」

の説明の中で疫病には一切触れられていなかったのだから、ここに引用した小学館・角川・学研・旺文社は、かなり意味が特化されているというか、「世の中騒がし」が限定的に解釈されていることになる。それが高校生用の古語辞典であるのは、重版されることが多いので新しい説が取り入れやすいからであろうか。

三

ここまで長々と古語辞典における説明の違いを見てきた。しかしながら、何故かそのことが論文に書かれることはなかったようである（探しても見つからなかった）。東日本大震災後の平成二五年に刊行された『天変地異と源氏物語』（翰林書房）にしても、当然のことながら天変地異（ものごと）^①が主体・焦点となっており、疫病については看過されていた。

最近になってコロナが世界的に蔓延したことで、過去の疫病流行が歴史を遡って顧みられ、疫病の歴史が雑誌の特集になったり単行本として出版される中、ようやく「世の中騒がし」表現が疫病流行のキーワードとして論文に登場してきた。それが、
・桜井宏徳氏『『栄花物語』（世の中騒がし）小考―疫病の流

行をめぐる表現として―』『危機下の中古文学二〇二〇』（武蔵野書院）令和3年3月
・河添房江氏『『源氏物語』と王朝の疫病―薄雲巻の「世の中騒がし」を中心に―』文学語学231・令和3年4月
である。この二本がほぼ同時に発表されていることにも留意したい。というところで論文のタイトルを見ると、桜井氏は『栄花物語』を中心に広く論じられており、河添氏は逆に『源氏物語』薄雲巻に特化していることが見て取れる。

『栄花物語』はストリートに「世の中騒がし」に疫病の流行と死を記しているのだから、桜井氏が『栄花物語』を取り上げたのは当然だろう。それに対して河添氏は、ほとんど疫病に触れていない『源氏物語』から、王朝の疫病を論じようとしておられるのだから、察するにかなり大変だったに違いない。

ということ、普通ならばこのお二人の功績として高く評価したいところであるが、前述のように既に複数の古語辞典に示唆的なコメントがあったのだから、むしろコロナ以前の古語辞典の説明をこそ高く評価したい（誰が言い出したのかまでは特定できていない）。

それはさておき、桜井論を参考にして「世の中騒がし」表現を有する作品を列挙すると、

『うつほ物語』・『蜻蛉日記』・『枕草子』・『源氏物語』・『朝忠集』・『大納言公任集』・『紫式部集』・『和泉式部続集』・『大鏡』・『栄花物語』・『後拾遺集』・『狭衣物語』・『更級日記』・『徒然草』

など、かなり多くの平安朝の作品に用いられていることがわかった。⁽³⁾疫病は奈良時代にも流行しているにもかかわらず、上代の文学作品には見当たらないこと、また案外和歌の詞書には見られることを付け加えておきたい。初出は前述の『うつほ物語』あて宮巻のようで、

すべて世の中いと騒がしかなり。これがわづらふやうに、みな人あなる。源宰相も死ぬべしとなんいふめる。

(117頁)

と「わづらふ」(疾病用語)を伴って書かれている(桜井氏も注目されている)。用例が一番多いのは『栄花物語』の十七例である。歴史用語では疫病の流行が政治とかかわる重要事項なのであろう。

また辞書に引用されていた『枕草子』一三七段「殿などのおはしまさで後」には、

殿などのおはしまさで後、世の中に事出て来、さわがしうなりて、宮もまゐらせたまはず、小二条殿といふ所におは

しますに、(259頁)

と見えている。ただし前述のように「世の中」と「さわがし」の間が離れていることもあって、疫病に特化されてはいなかった。かろうじて頭注二二に、「など」とあるのは、同年五月八日の関白道兼の死など、四月五月に流行した疫病の折のことを含めた表現か。婉曲表現か。」とある程度であった。この注が書かれた頃には、疫病への関心がまだ薄かったことが察せられる。

四

ここで参考までに、河添論を参照させていただいて、当時の疫病の流行を簡単に紹介しておこう。正暦四年から長保三年までのわずか十年足らず(『源氏物語』が執筆される直前)を例にしただけで、

正暦四年(九九三年) 咳逆疫(インフルエンザ)・疱瘡(天然痘)の流行

正暦五年(九九四年) 疫病の流行 京都で五位以上の六七人死亡

長徳元年(九九五年) 疫病の流行 納言以上二人、四位

七人、五位五四人死亡

関白藤原道兼・左大臣源重信・大納言朝光・大納言
言濟時・大納言藤原道頼・中納言源保光・中納言伊
陟死去（関白道隆は糖尿病?）

長徳四年（九九八年） 痲瘡（麻疹）流行

長保二年（一〇〇〇年） 疫病流行

長保三年（一〇〇一年） 疫病流行 為尊親王死去 夫宣

孝死去

といった疫病の流行があげられる（天変・地震・飢饉・台風などは省いた）。これを見ると、ほぼ毎年のように疫病が流行していることがわかる。もちろん一口に疫病といっても、天然痘だけでなくインフルエンザ・麻疹・赤痢など複数の疫病がしばしば猛威を振るったようである。こうしてみると、震災などより疫病の方が京都での被害（死者の数）は甚大だったのではないだろうか。

これは現在のコロナ禍の状況と類似しており、第一波・第二波と繰り返しているようである。こういった疫病のことは、『日本紀略』正暦五年（九九四）条の末尾に、

今年正月ヨリ十二月ニ至リテ、天下ノ疫癘最モ盛ンナリ。
鎮西ヨリ起コリ七道ニ遍満ス。（国史大系本179頁）

とあって、外国から感染者が入港することで、まず鎮西（大宰府）で発生し、それが街道沿いに拡散して京都までもたらされるようである。正暦五年の「五位以上六七人」や長徳元年の「五位五四人」はとんでもない数である。長徳元年など、公卿だけでも七名が亡くなっている。その年の公卿は全部で十四人なので、その半数が亡くなっていることになる。しかも疫病以外で道隆も亡くなっているのだから、この年は欠員補填がはなはだ多かったことになる。

次に桜井氏の御論を参考にさせていただくと、その正暦五年について『栄花物語』みはてぬゆめ巻には「わづらふ」を伴って、

はかなくとしもくれて、正暦五年といふ。いかなるにか、
ことし世の中さはがしう、春よりわづらふ人々おほく、み
ちおほぢにもゆゆしき物どもおほかり。（203頁）

とあり、長徳元年については、

かくて長徳元年正月よりよの中いとさはがしうなりたちぬ
れば、（208頁）

とある。また『大鏡』には長徳元年のことが、
その年の祭の前より、世の中きはめてさわがしきに、また
の年、いとどいみじくなりたちにしぞかし。まづは、大臣・

公卿多くうせたまへりしに、まして四位・五位のほどは、
数やは知りし (294頁)

と語られ、それに続いて亡くなった人の名前が、

閑院大納言、中関白殿、小一条左大將濟時卿、六条左大臣
殿、栗田右大臣殿、桃園中納言保光卿、山井大納言殿、

(294頁)

と七名も羅列されていた。また『大鏡』によると、

それもただこの入道殿の御幸ひの、上をきはめたまふにこ
そはべるめれ。かの殿ばら、次第のままにひさしく保ちた
まはましかば、いとかくしもやはおはしまさまし。

(295頁)

とあって、疫病流行のお蔭で藤原道長が破格の昇進を遂げたと
されている(焼け太り?)。この点が『栄花物語』と『大鏡』
の執筆意図の違いでもあるのだろうが、それはさておき道長は
どうもウィルスに強かったのではないだろうか。

続く長徳四年は疱瘡(麻疹)が流行しており、『日本紀略』
長徳四年条の末尾には、

今年、天下夏より冬ニ至リ疫疱遍発ス。六七月ノ間、京師
ノ男女死者甚ダ多シ。下人死ナズ。四位以下ノ妻最モ甚ダ
シ。(国史大系本191頁)

とあって、何故か四位以下の妻の感染が多かったことが記され
ている(「遍発」は広く起こること)。

『源氏物語』が執筆される直前に、これだけ大々的に疫病が
流行しているのだから、紫式部がそのことを知らなかったはず
はあるまい。第一、紫式部の夫・藤原宣孝にしても、長保三年
(一〇〇一年)に疫病に罹^かつて亡くなったとされているではな
いか。仮に夫の死が『源氏物語』執筆の動機となったのであれば、
疫病と『源氏物語』は深層で深く関わっていることになる。
だからこそ紫式部は、あえて疫病という直接的な表現を避けて
いるのかもしれない。

五

かつて『源氏物語』は、王朝時代の貴族の生活を知ることが
できる便利(重宝)な作品と考えられたことがあった。はなは
だしいものとして、『日本の歴史』の平安時代が『源氏物語』
を参考にして執筆されていることがあげられる(その頃の歴史
資料が少ないため)。しかし、たとえ平安中期の歴史資料が欠
落しているとしても、その穴を『源氏物語』(フィクション)
で埋めるというのは賛成できない(歴史家のすることではな

い)。何故ならば、『源氏物語』には日常の生活、いいかえれば当たり前のことはほとんど書かれていないからである。

『源氏物語』に書かれているのは、物語展開に必要なことに限られている。むしろ当たり前でないことが書かれていると思つた方がいくらいである。多発していた内裏の火事にも触れられていない。だから『源氏物語』を資料として平安時代の生活や文化を語るのは、逆に平安時代を大きく見誤ることにないかねないのである。『源氏物語』はそんな都合のいい作品(資料集)ではないのである。

ところが「世の中(の)騒がし」という表現が三回用いられていることに気付いた途端、状況が一変する。『源氏物語』全体でも、用例はこのわずか三例しか用いられていない。⁽⁶⁾しかも薄雲巻だけにキードのように三例まとめて用いられているという偏りがあつた。薄雲巻を見ると、同年に太政大臣・藤壺・式部卿宮の三人が立て続けに亡くなっている。その重要人物の死に関わるかのように「世の中騒がし」が繰り返されているのである。既に河添氏が論じられていることを繰り返すことになるが、あらためて用例を確認しておきたい。

1 その年、おほかた世の中騒がしくて、公さまに物のさとしげく、のどかならで、天つ空にも、例に違へる月日星の

光見え、
(443頁)

「その年」というのは直前の「そのころ、太政大臣亡せたまひぬ」(442頁)を受けている。頭注十三には、「天変地異や疫病が起る。以下永祚元年(九八九年)の史実をもとにしたとの説がある。」とある。ただし新編全集五二九頁の付録に疫病のことは記載されていなかった。これについて玉上琢彌氏「源氏物語評釈四」(角川書店)の語釈には、「世の中がいろいろな災害や流行病などで落ち着かない、不安が満ちている。」(182頁)と疫病に触れているし、わざわざ「凶兆頻出」という見出しを立てて、

「世のなか騒がしくて」というのは、伝染病がはやって、死亡者が多かったのである。この当時はいったん伝染病がはやりだすと手のつけようがない。自然に消滅するのを待つばかりである。歴史の上ではこの物語ができるすこし前、正暦六年(九九五年)一月から伝染病で、上達部がぞくぞくと死ぬ事件があつた(そのおかげで道長が政権の座にいたのである。いまの場合もそれで、多くの人々がなくなつた。

と、伝染病の流行を強調しておられる。こんなに早くに疫病に言及されていたのである。
(182頁)

ところが古注などにこういつた指摘は一切見当たらない。疫病に触れている早い例は江戸時代の『湖月抄』（北村季吟）からで、前述の「世の中さわがしくて」に「疫病のはやるなるべし。栄花物語などに、数多此ことばあり」（学術文庫中巻 169 頁）と記されていた。これを見ると、『栄花物語』に用例が多いことも既に知られていたことがわかる。あるいは私と同じように、『栄花物語』の例から遡って『源氏物語』の例を判断しているのかもしれない。しかし後に書かれた『栄花物語』の記事を先行する『源氏物語』にあてはめて読むというのは本道ではあるまい。

なお太政大臣については、

しばし籠りたまへりしほどをだに天の下の騒ぎなりしかば、まして悲しと思ふ人多かり。（442 頁）

と、かつて朱雀帝の御代に辞任していた時のことを、「天の下の騒ぎ」としている。賢木巻で辞任した左大臣にそんなことは書かれていなかったが、それを踏まえてここでは太政大臣の死去がその時に上に重たいできごとだったとしている。そのことは光源氏の口から死期迫る藤壺に、

太政大臣の隠れたまひぬるをだに世の中心あわたたしく思ひたまへらるるに、またかくておはしませば、よろづに心

乱れはべりて、（447 頁）

と語られている。ただし源氏は太政大臣の影響力をあえて「だに」として、藤壺の重要性を強調している。「だに」を意図的に繰り返すことによって、両者の軽重を示しているのである。次の用例はどうであろうか。

2 その日、式部卿のみこうせ給ぬるよしをそうするに、いよいよ世中のさはがしき事をなげきおほしたり。（453 頁）

3 こまやかなる鈍色の御直衣にて、世中のさはがしきなどこつけ給ひて、やがて精進なれば、（458 頁）

2 は式部卿のことを「奏す」とあるので、冷泉帝に奏上されたのであろう。3 は光源氏が斎宮女御を訪れているところであるが、藤壺の死を受けて喪服を身に着けている。おそらくその年は、この三人以外にも多くの人が疫病で亡くなっているはずだが、『源氏物語』はそのことをあえて語ろうとはしない。これについて頭注には、永祚元年（九八九年）の史実が踏まえられているとされている。というのも、この年に太政大臣のモデルである左大臣藤原頼忠が亡くなっているからである。ただし『小右記』などの記述によると、確かにその年に疫病も流行しているが、むしろ天変地異や災害の被害の方が甚大だったことがわかった。⁽⁷⁾ もう一人、藤原良房もモデルとしてあがっている。

彼など疫病死しているものの、従来の研究者の疫病に対する扱いが軽かったので、浮上しなかったのだらう、

なおこの三人の中では、式部卿の親王の死をあげている理由がよくわからない。太政大臣も藤壺も光源氏政権にとって重要人物だが、式部卿は親王ということもあって、源氏政権にさほど重要な役割を荷っていたとは思えないからである。あるいは式部卿というポストは、多くの親王を統括する重要な職掌なのであろうか。もしそうなら、これによって藤壺の兄兵部卿宮が次の式部卿に就任することに意味が見出せそうである。

六

あらためて薄雲巻を丹念に読むと、「世の中騒がし」に類似した表現がいくつか用いられていることに気付く。その一つが「世の中静かならぬ」である。これも一例のみならず、複数用いられている。

・ 天変頻りにさとし、世の中静かならぬはこのけなり。いと
きなくものの心知ろしめすまじかりつるほどこそはべりつ
れ、
(452頁)

・ 世の静かならぬことは、かならず政の直くゆがめるにもよ

りはべらず。

(454頁)

また若菜下巻にも「世の中静かならぬ車の音」(232頁)とあるが、これは疫病とは無縁の軽い用法なので除外したい。そうするとこれも薄雲巻の特殊用法としてとらえることができそう。特に前者は夜居の僧都によって、冷泉帝が出生の秘密を知らないことに起因すると説かれ、後者は源氏が冷泉帝讓位を戒める言葉として説かれている。

さらに1の末尾をみると、「のどかならで」とあることに気付く。これも上の文との繋がりが読みと、「世の中」のどかならでとなつていようである。そのことは『栄花物語』くものふるまひ巻にも、

世の中いと騒がしう心のどかならぬに、関白殿春より久しく
悩みわたらせたまふに、四月になりてはすこしよろしく
ならせたまふに、大将殿世の中の御心地わづらはせたまひ
けり。七日といふにうせさせたまひぬ。
(321頁)

とあり、関白頼道は回復しているものの、息子の大将通房はあつ
けなく亡くなつていいる。ここにある「世の中の御心地」は、既
に疫病感染に特化されているように読める(「わづらふ」も重
要)。同様に、

・ 天の下もかくのどかならぬによろづあわたしくなむ。

(453頁)

の「あわたし」にも留意したい。こういった関連語を含めて、薄雲巻には疫病を想起させる表現がこれでもかと仕掛けられている(鏤められている)ことになる。

これまで薄雲巻の「世の中騒がし」は、天変地異を天の啓示と見た冷泉帝が讓位をほのめかす方向で解釈されており、そのため疫病に重点を置く解釈は皆無に近かった。ところがコロナの蔓延によって、俄かに「世の中騒がし」と疫病の結びつきが注目されるようになったことで、疫病にウエイトを置いた解釈の再検討が要請されたのである。これは『源氏物語』がコロナに影響を与えたのではなく、コロナによって『源氏物語』研究者の偏見がようやく打破されたというべきであろうか。

いづれにしても薄雲巻には「世の中騒がし」が集中しているだけでなく、類義語の「静かならぬ」や「のどかならぬ」「あわたし」まで用いられており、それによって薄雲巻の異常性は自ずから看取される。そういった表現の中で、三人の重要人物が亡くなるのであるから、当然疫病を患って亡くなったのではないかという読みも可能であろう。しかしそこまでだった。

冷泉帝が讓位の意志を源氏にほのめかしたのは、必ずしも式部卿の死去が契機となっているのではなく、むしろ母藤壺の死

に連動して、夜居の僧都から父が源氏だと知らされたことが大きな要因のはずである。この後は「世の中騒がし」よりも、冷泉帝が密通の秘密を知ったことにウエイトが置かれている。というより、すべては源氏の政権がより一層安定化恒常化する方向で事態が収束している(世代交替を含む)。疫病の流行がどのように鎮静化したのかは書かれていない。

社会の不穏を描いている薄雲巻は、結局冷泉帝の御代で源氏の政権が磐石であることを再確認したにすぎないのだ。

まとめ

今回とりあげた「世の中騒がし」表現について正直に白状すれば、私はかつて「宝船」の調査を通して、『徒然草』二〇三段に五条天神が、

主上の御惱、大方、世中の騒がしき時は、五条の天神に^⑨鞆^⑩をかけらる。
(240頁)

と登場していることを承知していた。^⑨しかも新編全集の頭注一〇には、「流行病で世間が大騒ぎになる時」とあるにもかかわらず、「世の中騒がし」表現にまったく注目できていなかった。五条天神が葉の神様であることを考慮すれば、その時に疫病と

の関わりに気づいてもよかったのにと悔やまれる。

では「世の中騒がし」は、『日本国語大辞典第二版』の説明のように、疫病だけでなく戦争や天変地異・災害・飢饉とも深く関わっていると読むべきなのであろうか。それとも疫病に特化して読むべきなのであろうか。そう考えた時、本来は何でもいいのだろうが、その中で疫病の流行がもっとも発生する回数が多いことに思いついた。しかも人の出入りが多く、人口が密集している京都で蔓延しやすいのであるから、必然的に「世の中騒がし」の大半を疫病の例が占めても不思議はあるまい。それが古語辞典の解釈だった。

そんな中であって、特に『栄花物語』は積極的に疫病流行に伴う歴史の面白さを読ませようとしている。それに対して『源氏物語』の場合は、むしろ疫病を表面化せず、あえて韜晦している。夫の疫病死さえ臙化しているのだから、『源氏物語』に疫病を書かないのも首肯できる。ただし薄雲巻に「世の中騒がし」が三回も繰り返され、さらに類似表現が繰り返されて不穏な雰囲気醸成させており、必然的に読者が疫病の流行とそれに伴う冷泉帝の譲位を予測することは可能であろう。

ところが冷泉帝が夜居の僧都から密通の秘密を知らされたことで、かえって光源氏との提携が密接となり、譲位どころか光

源氏政権は一層盤石となり、一時は真剣に譲位を考えていた冷泉帝の御代も、光源氏に守られることで安泰となった。結果的に、太政大臣の力を借りなくとも、藤壺の協力がなくとも、光源氏は立派に政権を担当できるようになったのである。

「世の中騒がし」は、史実として疫病蔓延のキーワードであったが、『源氏物語』ではそれを表面化させず、重大事とせず、単に物語展開の契機として利用しただけだったと読みたい。だから薄雲巻以降には引きずらないのである。それこそが『源氏物語』の手法であった。桜井氏・河添氏の御論から多くのことを学ばせていただいた。末尾ながら謝意を表したい。

〔注〕

〔1〕所収されている藤本勝義氏「薄雲」巻の天変と天文密奏―冷泉帝の対応と「源氏物語」の独自性―にしても、「その年、おほかた世の中騒がしくて」とあり、具体的には記されていないが、疫病流行あるいは地震などが起きたということであろう（157頁）と疫病にも触れておられるものの、主として天変地異の重要性が論じられている。それとは別に、貞観の大地震と津波がクローズアップされた。私も「末の松山」について論じている。

〔2〕『危機下の中古文学二〇二〇』には高橋麻織氏「大鏡」天変地異に見る歴史認識―怨霊と疫病―も掲載されているが、高橋氏は『大鏡』

道長伝にある「その年の祭りの前より、世の中きわめてさわがしきに」本文を引用されているにもかかわらず、その表現の特殊性（疫病流行）には言及されていない。

(3)

桜井氏の御調査によれば、勅撰集では『後拾遺集』の詞書に四例ある他、私家集では『朝忠集』・『兼澄集』・『清少納言集』・『紫式部集』・『和泉式部集』・『公任集』などの詞書に「世の中騒がし」の用例が相当数見出せるのである。そういった用例の中には、「わづらふ」や「亡くなる」・「失す」・「死ぬ」と共起している例も見つかった。なお「世の中騒がし」に近い表現として「世の騒がし」（『伊勢集』・『和泉式部集』）もある。内容は類似しているが、ここでは「世の中騒がし」表現を考えているので別に考えたい。そのため『伊勢集』の例を初例とは認定しないこととする。また『蜻蛉日記』の「よのちいとさはがしかなれば」（192頁）に関しては、ちょうど天禄元年（九七〇年）に祇園御霊会が催されているのだから、疫病の流行として読み取れそうである。

(4)

『狭衣物語』には、
その頃、世のちいと騒がしうて、道大路にゆゆしきもの多う、
やむことなき人もあまた亡なりなどしたまへば、（338頁）
と類似した描写が出ている。これは『日本紀略』長保三年条末尾の「道路死骸其ノ数ヲ知ラズ」（国史大系本199頁）を踏襲したものである。

(5)

『紫式部集』の五二番には、
世中のさわがしきころ、朝顔を人のもとへやるとて、
消えぬ間の身をも知る知る朝顔を露とあらそふ世を嘆くくかな
（和歌文学大系216頁）
とあり、詞書の「世の中さわがしきころ」こそは夫宣孝が疫病で亡くなったことを暗示している。同年の為尊親王の死については、『和泉

式部集』の詞書に「世の中さわがしきころ」（一八四番）とあることから、為尊親王を疫病死と見る説もある。そのことは『栄花物語』みはてぬゆめ巻に、

・彈正宮いみじう色めかしうおはしまして、知る知らぬ分かね御心なりなり。世の中の騒がしきころ、夜夜中分かね御歩きもいとうしろめたげなり。（193頁）

・彈正宮うちへ御夜歩きの恐ろしさを、世の人やすからず、あいなきことなりと、さかしらに聞えさせつる、今年はおほかた騒がしう、いづぞやの心地して、道大路のいみじきに、ものどもを見過ぐしつあさましかりつる御夜歩きのしるしにや、いみじうわづらはせたまひて、うせたまひぬ。（357頁）

と書かれていることから察せられる。ただし亡くなったのがかなり経ってからなので、それを否定する説もある。もちろん二度感染した可能性もあるにはあるが、文脈として何が何でも疫病死にしたいようにも読める。

(6)

「世の中騒がし」でなければ、明石巻に出ている「そのとし、おほやけにものさとししきりて、物さはがしき事おほかり」（241頁）も「ものさとし」と共起しているので、疫病流行を暗示していると読めないことはない。なお明石巻には「物のさとし」が三例も集中している。

また桐壺巻で高麗の相人が登場するところに、

宮の内に召さむことは宇多帝の御誡あれば、いみじう忍びてこの皇子を鴻臚館に遣はしたり。（39頁）

とある。これは「寛平の御遺誡」のこととされているが、必ずしも天皇の威厳を保つためだけでなく、外国から齎される疫病の感染を避けるための処置という説もある。河添氏はこれを疫病に対する対策が施されていると見ておられる。

(7) 古記録類には疫病の蔓延について記述されているものの、それを「世の中騒がし」という語で包括している例は見あたらない。「世の中騒がし」は歴史用語ではなく、仮名文学特有の疫病醜化表現といえそうである。

(8) 兵部卿官は少女巻で「兵部卿と聞こえしは、今は式部卿にて、この御時にはましてやむことなき御おほえにておはする」(31頁)と式部卿に就任していることが語られている。また若菜下巻では、「親王の御おぼえいとやむ」となく、内裏にも、この宮の御心寄せいとよなくで〈中略〉、この院、大殿にさしつぎたてまつりては」(160頁)と「さしつぎ」の地位を獲得している。これは村上天皇の天皇親政に近い。

(9) 頭注にはまた、「五条天神も靱の明神も、疫病神として靱をかけて封じられたものである」とも記されている。奇妙なことだが、これが当時の疫病に対する対処法の一つだったのである。

〔補注〕「騒ぐ」という動詞については、土屋裕美子氏「平安・鎌倉時代における「さわぐ」を構成要素とする複合動詞語彙」『鎌倉時代語研究第三三輯』(武蔵野書院)平成12年10月、萩田みどり氏『源氏物語』における「騒ぐ」について―周囲の視線を中心に―平安文学研究衣笠編・平成26年3月などがある。